# 時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学研究所副所長・教授

## 「馬力」と「場力」

# 国際協調に価値観の違い

人類は、大きくいって、富のみなもとを土地に求める人びとと家畜など動物に求める人びとに分かれてきたように思う。土地に富を求めた人びとは例えば農耕民のことで、富のおおきさは土地の広さと肥沃（ひよく）さによっている。後者の人びとの代表は遊牧民で、飼っている家畜の頭数が富の大きさの物差しだ。彼らは動物の群れとともに移動するので、土地に執着することがない。

両者は、富の配分をめぐって根深く対立してきた。古いところでは、農耕が始まるよりずっと前の、現生人類の祖先と先住民ネアンデルタールとの間の摩擦もそうだったという見方もある。現生人類の祖先がいつから農業をやっていたかは未解決の問題だが、これが本当とすればおもしろい話だ。

文明が誕生してからも両者の対立は続く。それは農耕民と遊牧民の対立としてあらわれた。メソポタミア文明のウル第3王朝期（約４０００年前）にも王たちが遊牧民に手を焼くようすが記録に残されているという。中国でも、遊牧民の「侵略」に手を焼いた漢民族の支配者たちは、万里の長城を築くなどの対策を講じた。しかし遊牧民にとっては、草を求めて動く家畜の群れとともにたどりついたところがたまたま農耕民の土地だったというだけのことである。

両者の間のあからさまな対立は、現代にはさすがに影を潜めたかにみえる。国際競争の時代に代わり、国際協調の時代が来ているという指摘もある。国際協調はむろん重要だが、しかし、価値観の違いはまだはっきりと残っていると私は思う。

川勝知事は先日大阪での講演で、農耕民である日本人には「馬力」よりも「場力」という考えがふさわしいと言っているが、馬と場のたった1文字の違いに価値観の違いがよく言い表されている。元横綱の朝青龍の土俵のマナーが問題になったが、遊牧民たる彼に土俵の場力がどこまで理解できていただろうか。明治以降、特に戦後、日本には欧米の文化や考え方が急速に流れ込んできたが、それによって日本人の考えが完全に欧米化したわけではない。人によっては、「アメリカでは…」、「欧米では…」という枕詞を使って自分の言い分を通そうとするが、さて、それにどれほどの説得力があるかは疑わしい。

縄文時代このかた数千年の長きにわたり、土地の恵みに生かされ、農業を営んできた日本人の社会には、土地を守り土地を生かす智恵が脈々と流れてきた。山をその頂に至るまで耕しては土地を増やし、草をとっては堆肥にし、水が足りないといってはため池を作り洪水が来るといっては堤を築きながら、私たちの先祖は生きてきた。何も植えられない農地を耕作放棄地というが、耕作放棄地は全国平均で1割にも達するという。耕すことをやめた農耕民に未来はない。いったい私たちはどこへ行こうとしているのか。一度立ち止まって自らに問うてみる必要がある。

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏　京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」（角川書店）「ＤＮＡ考古学のすすめ」（丸善ライブラリー）など。